

愛おしき隣人

2008(平成20)年3月13日鑑賞<GAGA 試写室>

★★★



監督・脚本＝ロイ・アンダーソン／出演＝ジェシカ・ランバーク／エリック・ベックマン／エリザベート・ヘランダー／ビヨルン・イングランド／ビルギッタ・ベルソン／ケマル・セナー／ホカン・アンサー（スタイルジャム、ビターズ・エンド配給／2007年スウェーデン、フランス、デンマーク、ドイツ、ノルウェー、日本映画／94分）

……北欧のとある街の住人たちの営みはいかに……？ そんなテーマで温かくかつユーモラスに人間たちを描くのは、スウェーデンのロイ・アンダーソン監督。広く世界に目を開き、今まで知らなかったたくさんの監督とその作風を勉強しなければ……。

この映画を監督・脚本したスウェーデンのロイ・アンダーソンは1943年生まれだが、27歳の時の長編デビュー作『スウェーディッシュ・ラブ・ストーリー』（69年）が1970年のベルリン国際映画祭で主要4冠を受賞した有名な監督とのこと。しかしそんな情報は、今回はじめて知ったもの。

また、『散歩する惑星』（00年）が2000年のカンヌ国際映画祭で審査員特別賞を受賞し、今回の『愛おしき隣人』も2007年のカンヌ国際映画祭のある視点部門に正式出品とのことだが、近時多くなっている単純明解な邦画（？）と違い、カンヌ出品作は難解なものが多い……？

この映画には特定の主人公はいない。舞台は北欧のとある街。そこに住むさまざまな住人たちにはさまざまな人生があり、いろいろなドラマがある。ロイ・アンダーソン監督のカメラはそんな人間の営みのひとコマひとコマを温かい目で追っていく。

したがって、あえて言えばこの映画の主人公は、1人1人の愛すべき面白い人間たち……。そんな住人の1人であるアンナ（ジェシカ・ランバーク）は、「ブラック・デヴィルス」のギタリスト兼ボーカルのミッケ（エリック・ベックマン）の大ファンだが、彼女が昨夜見た夢は何とこのミッケと結婚した夢らしい。

ウエディングドレスを着たアンナはミッケのギターを聴きながら家の中で幸せいっ

ばいだが、なぜかその家自体がレールの上を動いていた。そんなことって、あり……？ そして、到着した駅ではたくさんのファンからのお迎えと祝福が。

アンナがそんなことを語るのには住人たちが集まるバーの中のだが、なぜかこのバーのシーンは、ラストオーダーを告げる閉店直前ばかり……？

この映画の登場人物は多いし、住人A、住人B、住人C等の営みはバラバラで何の脈絡もない。しかし、その表現はそれぞれ面白いものばかり。もっとも、テーブルの上の食器を割ってしまったからといって死刑判決を受け、電気イスに座らされるのは少しかわいそう。また、長年軍楽隊で演奏しているやせ男がホルスタインのようなおっぱいの太った妻と女上位でセックスしているシーンは、2人がしゃべっている(?) 内容がまるで違い違っているため、何ともコッケイ。その他、たくさんの住人たちのリビングをのぞいてみると、たしかに「愛おしき隣人」ばかり……。

人生は楽しさや幸せもあれば、孤独や喪失もある。したがって、この映画にはそんな隣人たちの姿も描かれるが、たとえそうであっても、ロイ・アンダーソン監督が描く「愛おしき隣人」たちには愛とユーモアがいっぱい。なるほどこれが、スウェーデンの映画監督ロイ・アンダーソンが多くのファンから愛され続けている理由なのだと、やっと納得！

2008(平成20)年3月14日記

第3章

十人十色の生き方を描く

